Title	社会人とスピリチュアルマインド
Author(s)	窪寺，俊之
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume29， 2015.3 : 117-131
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5507
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

社会人とスピリチュアルマインド

窪寺俊之

一　スピリチュアルケアとは何か

「スピリチュアルケア」が日本で注目を浴びるようになった出来事が二つあります。

1　健康の定義の改訂

一九九九年に世界保健機関（ＷＨＯ）が健康の定義を改訂しようとしたことが切っ掛けです。各新聞にＷＨＯが健康の定義を改訂するという記事が掲載されました。新しい定義の中にスピリチュアル・ウェルビーイング（spiritual well-being）という言葉が出ました。それまでの健康の定義は、「完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない。」ですが、[1] それを改めて「完全な肉体的（physical）、精神的（mental）、Spiritual 及び社会的（social）福祉の Dynamic な状態であり、単に疾病または病弱の存在しないことではない。」としようとしました。[2] この議題は執行理事会では通過して、翌年の一九九九年の総会で議決さ

れる予定でしたが、議題として提出されることもなく、現在は議長預かりという状況になっています。ＷＨＯの健康の定義の改訂に「スピリチュアル」という言葉が出たことで、この言葉が日本でも脚光を浴びることになりました。

ＷＨＯがspiritual well-beingを問題にしたのは、人間の健康は単に身体的、心理的に病んでいないというだけではなく、人間の健康はもっと深く宗教的な要因を含むことを言いたかったと想像します。自分は「何のために生きるのか」という宗教的・哲学的問題が身体的健康にも影響を与えると言っているわけです。別の言葉で言えば、宗教的・哲学的問題は人間全体の健康や幸福という問題と関わっていることを語っているのです。

2　近代ホスピスの誕生

もう一つ、「スピリチュアリティ」に関心が持たれた出来事がありました。それは終末期ガン患者さんのための「ホスピス」でスピリチュアルケアの必要性が叫ばれたことです。一九六七年、英国で近代ホスピスがシシリー・ソンダース医師によって創設されて、そこで終末期ガン患者のためのスピリチュアルケアが実施されました。[3] それまでの医療は、疾患治療中心になっていたので、スピリチュアルケアなどにはまったく関心がありませんでした。ところが終末期がん患者さんへのケアではスピリチュアルケアは不可欠だということになり、一挙に関心が高まったわけです。

この二つの事柄を切っ掛けにして、「スピリチュアルケア」や「スピリチュアリティ」への関心が一挙にふくれあがりました。このようなスピリチュアルケアへの議論は、世界的規模で医療や健康の領域で広がっていきました。ここで私たちが気づかされたことは、健康には「スピリチュアルな問題」が深く関わっていることです。単に身体

的問題だと考えていた健康は、狭い理解だったのです。人間のたましいの問題を含む健康理解に気づかせてくれました。スピリチュアル・ウェルビーイングは「霊的健康」と翻訳できるかと思います。これが具体的に何を意味するかをお話ししたいと思います。

二　スピリチュアルケア、スピリチュアリティの意味

一般的には、スピリチュアル（spiritual）は「霊的、神秘的、内的、精神的」などと翻訳されています。もともとスピリチュアルは、スピリット（spirit）から出た言葉です。この言葉には二つの大きな意味があります。[4]

①Spiritの原義は「風、息」です。風も息も目に見えません。しかし、風は吹いてきて草木を揺らし、物を動かす力を持っています。そこから、「神秘的、霊的、精神的」の意味が出てきます。そこからさらに変化して、スピリチュアル（spiritual）は、「宗教的な、霊的な」という意味に発展しました。

②もう一つの意味は、酒です。この意味から「内側から元気を与えるもの」などの意味が生まれ、さらには「生きる力の源」「元気を与えるもの」などの意味が出てきます。

以上のようなところから「スピリチュアリティ」は目に見えない神秘的な事柄を示すので、宗教的ニュアンスを持ったのです。「スピリチュアル」と「宗教的」は目に見えない神仏に関わり、神秘的事柄との関係性を表しています。しかし、両者の間の相違点は、「スピリチュアル」は、宗教の教理や戒律に縛られないで、人間の存在の在り方を支えるものや人間の生きる意義を与えるものを指しています。私たちの持つ価値観や人生観とも関わっているわけです。

三　現代社会とスピリチュアリティ

1　現代人の苦悩

現代人を支配している価値観は能力主義、実力主義、成果主義です。[5] この価値感が日本全体を支配していて多くの問題を生んでいます。子どもたちは良い成績をとるため塾に通います。大人は企業業績を上げようと夜遅くまで働きます。女性も男性に負けまいと頑張っています。日本社会は成果主義になり、競争社会、個人主義、自己責任が叫ばれています。競争に勝つためには人を押しのけたり、人間としての優しさを軽視する傾向が出てきます。このような問題が子どもたちのいじめ問題、不登校児の問題、大人のうつ病、家庭内暴力、自殺、そして高齢者の孤独死などの一因になっています。社会、家庭、企業、個人が危機的状況です。この危機的状況の最も恐ろしい点は、人間崩壊が起きていることです。人間の内面が崩壊して、正常に機能しなくなっています。

このような問題を解決するために政府も対策を打ち出しています。また、学校、企業、社会もこの問題解決に努めています。学校カウンセラー、企業カウンセラー、家族カウンセラーなどが全力で労しています。学校、企業、家庭での精神衛生が問題になっています。現代の家庭の構造に精神医学的問題がないか、あるならば、何が問題かなどという研究もなされています。貧困家庭への財政的支援も不十分ながら考えられています。これらのことはすべて大切なことです。精神医学的アプローチ、財政支援的アプローチ、教育的アプローチなどは直面する問題を解決するには、不可欠です。

このような状況に対して、スピリチュアリティの視点からの発言もあります。スピリチュアルケアは、心理カウ

ンセリングよりももう少し深い魂のレベルで人間に関わろうとします。「なぜ、こんな苦難が自分を苦しめるのか」「なぜ、こんな病気にならなければならないのか」などの苦悩には、必ずしも客観的解決がありません。そこで、本人が納得する解決を見つけ出すように、本人に寄り添いつつ本人を支えます。

スピリチュアルケアは傷ついた人に優しく寄り添うケアです。例えば、学校、企業、家庭、社会環境が素晴らしくても、私たちは「私の人生の意味は何か」、「死んだらどこにいくのか」という悩みを持っています。あるいは、私の人生には生きる価値があるのかと悩むのです。これらの問題は非常に実存的テーマです。宗教的テーマでもあります。[6] 社会、企業、家庭が解決を与えられるものではありません。「今、ここにいる」自分が納得できる答えを見つけるしかないテーマです。そのようなテーマは、宗教的テーマでもあります。宗教的なテーマですから、神仏や人間を超えた超越者との関係の中で自分の人生の意味や目的を捉えることになります。人間は有限な存在でありながら神仏の愛や慈悲の中で生きることができる、と宗教は教えています。自分の肉体が消えても、魂の次元では神や仏の手の中にいる自分を見ることができるわけです。

ところが、最近は、宗教に対する警戒感が強くあって、教団や教義に縛られずに純粋に魂のこととして扱うスピリチュアルケアに関心が持たれています。

現代人のように自己の主体性を重んじる人は、宗教に入ることは自由を失うことだと警戒します。宗教的ケアではなく、むしろスピリチュアルな考え方が好まれています。スピリチュアルケアは、個々人のスピリチュアリティ（宗教性、霊性、たましい）を尊重するので、その人の側に寄り添って支えるケアです。しかし、宗教のような教義や儀式は持ちません。傷ついた人と一緒に「人生の目的」や「苦難の意味」「死後のいのち」を探す旅に付き添ってくれるものです。あくまで傷ついた人本人が主役になるケアです。ケアする人は奉仕者です。

2　スピリチュアルな思考

実は、スピリチュアルな次元で人生、社会、世界を考えることで、新しい視野が開かれていきます。スピリチュアルな思考とは、私たちの存在を水平の関係から垂直の関係をも加えて全体的・総合的に考えることです。[7]「わたしとあなた」という関係は、わたしとあなたが水平の関係にあります。例えば、両親、兄弟姉妹、同僚などとの関係は人間同志の水平関係です。それに対してスピリチュアルな関係は垂直の関係をもって見ることです。神仏や超越者との垂直的関係の中で自分・人生・仕事・社会・世界を見るものです。この神仏や超越者が人間を見守り、支え、常に一緒にいてくださると考えることが、スピリチュアルな考え方なのです。人間存在はこのスピリチュアルな存在の守りと支配の中に生きているのです。私たちの生命、存在、運命は、神仏や超越者の意志、計画の中にあると考えます。人は自分は独りだ、孤独だと考えやすいのですが、実は、神仏や宇宙を支配する存在者の意志と計画の中にいたと気づくのです。

スピリチュアルな考え方についてもう少し具体的に説明してみましょう。

①スピリチュアルな視点から見るとすべての人が平等です。また、すべての人が生きる意味や目的を持ちます。人生の意味や目的があるとわかると、希望が湧いてきます。希望の源はスピリチュアルな存在との関係から出てきます。

②スピリチュアルな視点を持つと、行き詰りや絶望がないと気づきます。いつでも上を見上げるとき、そこに窓が空いていて、大きな空が見えてきます。

スピリチュアルな視点から見ると、病気、失敗、挫折などで諦めたものや、自分の悩みが、小さく見えてきます。病気や苦難を負う自分がスピリチュアルな存在者の手の中にあると信じられると、孤独や近視眼的見方から解放さ

れ、自由になり、光が見えてきます。孤独だと悲観していた自分から解放されて、人との絆が見え、人々の思いやりや親切が伝わってきます。そこに未来が開かれていきます。

今、社会に競争主義、結果主義が蔓延（まんえん）し、人々は心の底から傷づき、痛んでいます。だからこそ、スピリチュアルな癒やしが求められているのです。スピリチュアルな癒やしこそ、人間が人間らしく、生きるために必要なものです。

四　スピリチュアル・マインド（霊的配慮）

さて、聖学院大学は二〇一二年の四月に新しい学科を創設しました。「こども心理学科」という学科です。この学科は今までの学科とは少し違ったコンセプトを理念として掲げています。皆様もよくご存じのように、二〇一一年三月一一日未曾有の東日本大震災が起きて日本全体が深い心の傷を負いました。この大地震と津波で多くの尊い生命が失われ、家、仕事、財産を一瞬に奪いさられました。過去、現在、未来を失った方が何万人とおられます。

この未曾有の大災害を経験して、行政、社会、科学、工業、思想、哲学、宗教に携わる人は、深く考えさせられました。自分の責任を考えさせられました。教育界でもいろいろの試みがなされています。聖学院大学でも、この危機を経験してキリスト教の心を実現したいと考えました。そこで示されたことは、傷ついた心を癒やすことのできるような学生を育てたいというものです。このような思いが「こども心理学科」の根底にあります。この新しい学科の柱にスピリチュアルケアという理念を立てました。心に深い傷を負った人への癒やしの業に参加できるよう

な人を育てることです。スピリチュアルケアは、人間を超えた神仏や超越者からの癒やしを求めたケアです。具体的には三つの特徴があります[8]。それは、優しさ、感性、信じる心を持つ学生を育てることです。

①優しさ→悲しんでいる人の脇に居続ける思い遣りの心
②感性→他人の心、魂の葛藤、苦しみ、苦悩、苦痛を感じ取る心
③信じる心→神仏、超越的存在を信じる心、そして人生を諦めない心、信頼関係を大切にする心

「優しさ、感性、信じる心」を持つ学生さんは一見弱い学生のように見えます。今日企業が求めている人材は強い人間、がむしゃらに働く人間だと思います。

実は強さには二種類あります。一つはオリンピックで優勝するような強さです。もう一つは、人を生かすために人に仕える内的な強さです。競技で優勝するための強さは、人をかき分けて一歩でも自分が先に出ることを求めます。人を負かすことで勝利をつかむような強さです。もちろん、スポーツ選手で優れた成績を収めることは容易ではありません。大会で勝利したことは褒められるべきです。しかし、その勝利は自分の栄誉のためです。負けた人がいて、その人たちの悲しみなどは無視されてしまうのです。

それに対して、人を生かすための強さがあります[9]。そのような強さを聖学院大学は考えています。弱い人、傷づいた人を助けることは、自分が勝つことを目標にしてはできないのです。人を生かすためには、優しさが必要であり、人の痛みや悲しみを感じ取る感性が必要です[10]。また、人間は神仏によって創造されたものであるという信仰が必要です。この信仰があると、どんなに弱く見える人の中にも強さがあり、生きる力があることを信じられます。

このような強さを持つ人が、今社会で求められている人たちです。

このような強さはスピリチュアルな考え方から出てきます。自分自身が大きなものに支えられているという確信があるので、弱い者への優しさや感性が生まれてくるのです。このスピリチュアルな考え方のできる学生を世に送り出すことを、「こども心理学科」は目的にしています。スピリチュアルな考え方のできる人は、世の中を作り変えます。すべての人と共に生きる共生社会が生まれてきます。また、企業の中に優しさや労りの気持ちが湧いてきて、職場環境は変わっていくと考えています。

本当の強さとは何か、それは、皆と一緒に生きるための、忍耐、希望を持ち続ける心です。また、相手を受け入れる、自分と同じように人を受け入れられる心です。

これが聖学院大学のこども心理学科が目指している目標です。この大学を卒業する学生はそんな精神で育てられた学生となるのです。

五　本当の強さを持つ企業人

企業人の中にも、このようなスピリチュアルな考え方をしている方が大勢います。最近読んだ本に、佐々木常夫さんの『これからのリーダーに贈る17の言葉』があります。[11] 佐々木さんは、東レという会社に約四〇年勤めたビジネスマンです。そしてこの本の中で、本当のリーダーとはどんな人かということを書いています。少し引用してみましょう。

リーダーとは「リードする人」、すなわち「人々を率い、導く人」である。ただし、力づくで率いるのではない。あくまでも人々が自主的に、喜んでその人に付き従おうとしなければ本物ではない。しかし、このリーダーシップは「目に見えないもの」であり、かつ「計測できないもの」である。しかも、その人がリーダーであるかどうかを決めるのは本人ではない。周りの人がそう認めたり、感じたりしたときにはじめてリーダーたりうるのだ。[12]

佐々木さんは尊敬するリーダーのエピソードをいくつも挙げています。その中には石川島重工業や東芝社長をした土光敏夫さん、ヤマト運輸の小倉昌男さん、伊藤忠商事の丹羽宇一郎さんなどの話があります。その人たちは、リーダーとしての志を堅く持ち、いかなる困難にも負けないビジョンを持っていました。この本で特に私自身が感動したのは、日本理化学工業の大山泰弘社長の記事です。この会社は、知的障害者雇用割合が七割を超えるチョーク製造会社です。この会社を少し紹介したいと思います。

一九五九年のある日、養護学校の先生が大山さんの会社を訪れ、生徒の就職を依頼したと言います。大山さんは、「そんな、おかしな人を雇ってくれなんて、とんでもないですよ。それは、無理なご相談です」とおっしゃったそうです。しかし、あきらめずに三度も訪れた先生の熱心な姿勢に心打たれて、二週間だけ、ふたりの少女の就業体験を受け入れることにしたのだそうです。職場では、ふたりの少女は一言も口をきかず、無心で仕事に励んだそうです。お昼休みのベルにも気がつかないほど集中して働いたそうです。二週間はあっという間にすぎました。大山さんは内心ホッとしていたそうです。しかし、ひとりの女子社員がやってきてこう言ったそうです。「こんなに一生懸命やってくれているんだから、ひとりかふたりだったらいいんじゃないですか。私たちが面倒をみますから、

あの子たちを雇ってあげてください」と言い、「これは社員の総意です」と迫ったそうです。「ほんとにいいの？」と念を押すと、「大丈夫ですよ。だんだん慣れてくるはずですから」とにこやかに答えたそうです。大山さんは、ふたりの少女を正式採用することに決めたのです。[13]

このようにして大山さんの会社では七割の方が障害を持ちながら働いているのです。こうして大山さんは、今は障害者の仕事場を保障することを自分の使命として生きるようになった、と言います。

この大山さんの中には、本当のリーダーとしての資質があるわけですが、それは障害者への優しさであり、人の可能性を信じる心です。それが障害のある人たちと一緒に働くことに生きがいを感じている根拠になっています。その上で、大山さんは、「私は、これまでの人生を導かれるように生きてきました」と述べています。[14]

この大山さんの言葉には、人生を自分で切り開いてきたという驕りは見えません。むしろ、自分の人生は何かによって導かれ、支えられて築いてきたのだという謙遜さと深い信念があるのを感じます。

ご本人はスピリチュアルなどということは一言も言っていませんが、私にはスピリチュアルな生き方であるように感じられます。

佐々木さんはご自分の生涯についても述べています。それによりますと、ご長男が自閉症でした。[15] また、奥様が肝臓病を患い、さらにうつ病になり、自殺未遂を繰り返されたようです。ご自分の家には病気の妻がいて、会社の仕事との間に挟まれて苦しまれた様子が書かれています。

「いい日」はなかなか訪れてはくれなかった。それどころが、病状が一進一退を繰り返すなか、妻は家族に負担をかけていることを気に病んだことからうつ病までも併発するに至った。このころ、長男と妻にかかる経

済的負担は毎年３５０〜４００万円であった。そして、その負担がいつまで続くかわからない。私には、日々戦っていく道しかなかったのだ。しかし、そうした日々の中、最悪の事態を迎える。妻の三度に及ぶ自殺未遂だ。一度目と二度目はためらい傷だった。しかし、三度目は本気だった。このとき、私のなかに、「こんなにがんばっているのに、なぜ？」という自己憐憫の気持ちがなかったと言えば嘘になる。しかし、７時間に及ぶ手術を終えて奇跡的に命をつなぎとめた彼女の姿をみて、私ははじめて気づいたことがあった。それは、病気を介護をしている人より、病気になっている人のほうが何倍苦しみ悩んでいるか、ということだった。今、私は痛恨の思いで、かつての自分を振り返っている。私は、リーダーとして家族の世話をするのが当たり前だと思っていた。それが、リーダーの責任だと思っていた。しかし、そこに、「してやっている」という上から目線の気持ちはなかっただろうか？　その気持ちは、無意識的であれ、間違いなく私のなかにあったのだ。それが、いかに彼女を追いつめ、苦しめていたことだろう。[16]

私は佐々木さんの正直な告白に感銘を受けました。人生との向き合い方が素晴らしいと感じました。それは自分の人生と真っ正面から向き合って受け止めていたこと、また、自分の人生に苦しいことが襲ってきても決して諦めたり自暴自棄にならなかったこと、また、自分の人生を呪ったり、人のせいにしなかったこと。そして自分の生き方を広く見直す心の柔軟さを持っていたことに驚きます。そして、次のように書いています。

私はリーダーシップとは「生き方」によって生まれ、磨かれるものだと考えている。さまざまな苦難にもまれ、それを乗り越えていく過程で培われていくものだと思うのだ。[17]

私は佐々木さんの中に非常に強い信念があるのを感じます。人生には苦難が付きものだが、その苦難には意味があるのだと信じておられます。苦難や災難を偶然の不幸だとは考えていません。むしろ、苦難や災難に意味を見出す心はスピリチュアルな考え方でもあります。私は佐々木さんの物の考え方にスピリチュアルな感性を見る思いがします。すべてのものに意味があると考えることは、スピリチュアルな考え方です。また、ビジネスマンとして生きる中で多くの困難を経験しながら、最後には自分の人生は神に導かれているように思うと語っています。ここにもスピリチュアルな生き方を見ることができます。

このように真のリーダーは単なる利益追求、経済優先、成果主義の人間ではありません。むしろ、優しさを持ち、人の気持ちを察する感性を持ち、人を信じ続ける心を持つ人と言えます。どんな人にも心を配り、人生を司る神仏や超越者を信じ、また、人を信じて努力する人だったとわかります。もしも、リーダーが利益追求だけにしか関心がなく、社員を無視した人ならば、人は決してついていかないでしょう。人一倍自分は働きながらも、人への優しさや悲しむ人の痛みを感じ取る感性を持ち、神仏や人を信じて忍耐できる人だから皆がついていくのです。

六　未来を一緒に作る

聖学院大学のこども心理学科の新しい理念は、スピリチュアルなマインドを持つ人を育てることであり、今までの教育とは異なるものです。優しさ、感性、信じる心を重視する教育理念です。このような教育理念で育った若者を世に送り出して、世にしっかりと貢献してほしいと願っています。人生には危機が付きまとっています。危機は

私たちに襲いかかり、私たちを打ち負かそうとします。誰の人生も、どこの企業も、どの社会も危機に直面します。スピリチュアルな考え方は危機を乗り越える力になります。新しい時代は共生の時代です。すべての人が力を出し合って一緒に社会を築いていくには新しい理念が必要です。スピリチュアルなものを見上げつつ、未来に望みを持って新しい時代を築いていきたいと願っています。

今日ここにご参加くださった方々は、会社を通して日本の経済を支えてくださっている方です。私たちは若者を育てて社会に貢献したいと願っています。

皆様と一緒に未来を開いていきたいと願っています。

（本稿は、二〇一二年一一月九日「聖学院大学就職懇談会」講演「人生の危機とスピリチュアルケア」に手を加えたものである。）

注

（1）世界保健機関での現行定義　Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

（2）改訂案　Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.

（3）シャーリー・ドゥブレイ『シシリー・ソンダース――ホスピス運動の創始者』若林一美ほか訳、日本看護協会出版会、一九八九年。

（4）窪寺俊之『スピリチュアルケア学序説』三輪書店、二〇〇四年、五―一八頁。
（5）このような価値観は経済成長を目指すには、非常によい価値感である。しかし、このような価値観には、結果を出すことを絶対的に求めるために、人格無視、人格尊重を忘れてしまい、その結果、人間喪失、自己崩壊をもたらしていることである。利潤は絶対的価値ではない。
（6）島薗進『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂、二〇一二年。
（7）窪寺俊之『スピリチュアルケア学概説』三輪書店、二〇〇八年、一六―二六頁。
（8）スピリチュアルケアの中心は、「癒やし」である。人と人との関係の和解、自分と自分の関係での自己受容、そして、自分と神仏との関係である信仰などが癒やしに含まれる。
（9）コリントの信徒への手紙Ⅰ　九・一九「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました」。パウロが語る自由は、自分に与えられた自由を他者を生かすために用いる自由であった。
（10）マタイによる福音書九・三六「群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」。イエスの生き方には、弱い人の痛みを自らの痛みにする感性があった。
（11）佐々木常夫『これからのリーダーに贈る17の言葉』ＷＡＶＡ出版、二〇一一年。
（12）同上書、五頁。
（13）同上書、二六―二九頁。
（14）同上書、二六頁
（15）同上書、四頁。
（16）同上書、一五〇―一五二頁。
（17）同上書、六頁。